「専門的緩和ケアサービスを利用するがん患者に対するがん疼痛治療の実態に関する前向き多施設共同観察研究」のお知らせ

疼痛はがん患者さんの身体症状のうち最も頻度が高いものの一つで、とくに進行期および終末期がん患者さんの有病率は66%と報告されており、38%は0～10のNRS（患者さんが感じている痛みの程度）で5以上の痛みを抱えておられます。疼痛緩和に関して1990年にガイドラインが出版され世界的に普及していますが、2014年の報告では約30%のがん疼痛が未だ十分な症状緩和が得られておらず、疼痛緩和は世界的にも重要な課題です。わが国でも2010年にガイドラインが作成され、2014年2020年とアップデートされてきましたが、2015年のがん患者さんの疼痛に対する多施設調査により、30%程度の患者さんがNRSで3以上の痛みを有しておられます。そこで、ガイドラインなどに則った標準的がん疼痛治療により疼痛緩和が図られる割合と、標準的がん疼痛治療では十分に緩和できない難治性疼痛の患者さんの割合、さらに難治性疼痛に対して有効であった治療を検討するために本研究が計画され当院も参加しています。

＜研究対象＞
当院で緩和ケアチームが診療している患者さんまたは緩和ケア病棟に入院中で、がん疼痛を有する患者さん

＜研究期間＞2025 年 3 月 31 日までを予定しています。

＜研究内容＞
年齢や性別、病期、原発部位、治療内容、使用鎮痛薬などの情報、疼痛治療内容、痛みの程度・部位・種類などを診療録などで集めます。

＜主任研究者＞
国立がん研究センター中央病院　緩和医療科　里見　絵理子

研究で集めるデータには患者さんのお名前や住所など個人を特定する情報は含まれません。研究結果は，研究代表者に情報を提供します。また、学会や出版物として公表することがありますが、いかなる場合でも個人情報が漏れることはありません。プライバシーは守られます。 本研究は当院の倫理・臨床研究審査委員会で承認されています。

本研究の趣旨をご理解いただき本研究に参加をお願いします。もし参加を望まれない場合は研究から除外しますので担当医師にお申し出ください。研究が始まった後でも自由に参加を取りやめることができますのでその際も担当医師にお伝えください。ご協力いただけない場合でも、今後の診療に不利益はきたしません。また、ご質問がある場合も担当医師にお伝えください。ご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

2020 年 11 月 2 日

京都桂病院　緩和医療科　部長　清水　正樹